大雪に備えましょう

気象庁はエルニーニョ現象の発生に伴って、今年の冬は暖冬になると予測しています。暖冬の場合、東日本の太平洋側では南岸低気圧が通過しやすくなり、低気圧のコースや発達の度合い、強い寒気の流入などの条件によっては、平成26年２月の時のような大雪が降ることも予想されます。

大雪に備え、施設の点検と事前対策の徹底を図るよう努めて下さい。

１　厳冬期を迎える前に行う、６つのこと

① ハウスの基礎や柱、ジョイント部の点検・修繕（腐食したり、ゆるんだりしている部分はないか？）
② ハウスの谷樋やハウス周辺の排水路の点検・整備（破損はないか？　ゴミなどがたまっていないか？）
③ ハウス被覆資材の点検・修繕（フィルムにたわみなどがないか？）
④ 加温機の点検・修繕（正常に動作するか？　ダクトに破損はないか？）
⑤ ハウスの耐雪強度向上のための補強構造の点検・追加（側面・妻面、屋根面で補強が必要なところは？）
⑥ 除雪道具や応急的な補強資材（中柱など）の点検・修理（いつでも使える状態になっているか？）

２　降雪が予想される時に行う、３つのこと

① 最新の気象情報、警報、注意報のチェック（常に最新の気象情報を入手し、迅速な対応につなげます）
② 加温機の燃料の確認と補給（あらかじめ十分な燃料を補充しておきます）
③ 降雪後の除雪に備えてハウス周囲の片付け（除雪作業がスムーズに行えるよう、整理整頓を行います）

３　雪が降り始める前～積雪時に行う、４つのこと

① ハウス内の加温と内部被覆（カーテン）の解放（予めハウス内を温めて、屋根の雪を滑り落ちやすくします。この対策が最も基本で、重要です）
② 応急的な補強資材（中柱など）の設置（予想を超えた大雪になることもあるので、早めの設置を）
③ 加温機の稼働状況の確認（加温は、ハウスの融雪対策の要です）
④ 除雪（屋根、軒下、ハウスの間など）は積雪が少ない時から（安全を確認し、除雪します）

４　雪が降り止んでから行う、３つのこと

① 施設周辺の安全確認（施設倒壊の恐れがある場合は、近づかないようにします）
② 施設各部の損傷や被覆資材の緩みなどの点検（安全が確認できたら、全体をチェックします）
③ 除雪（屋根、軒下、ハウスの間など）は安全を確認してから（積雪がある場合は、次回の降雪に備えて早めに除雪します）

試験研究成果発表会が開催されます

総合農業技術センター
日　時／平成28年２月23日（火）10:00～16:00（開催時間は変更の可能性あり）
場　所／双葉ふれあい文化館（甲斐市下今井２３０）

果樹試験場
日　時／平成28年３月１日（火）13:30～16:00
場　所／甲州市民文化会館（甲州市塩山上塩後２４０）

畜産試験場
日　時／平成28年３月３日（木）13:30～15:00（開催時間は変更の可能性あり）
場　所／畜産試験場会議室（中央市乙黒９６３－１）

山梨県普及センターだより

Yamanashi Agricultural Extension Service Information

■編集／発行　山梨県総合農業技術センター
■住所　〒400-0105　甲斐市下今井1100
■TEL.0551-28-2496　■FAX.0551-28-4909
■URL.http://www.pref.yamanashi.jp/sounou-git/
■E-mail.sounou-git@pref.yamanashi.lg.jp

No.31
平成27年12月20日発行

総合技術普及センター

水稲用新肥料「甲斐てまいらず」の普及に向けた取り組み

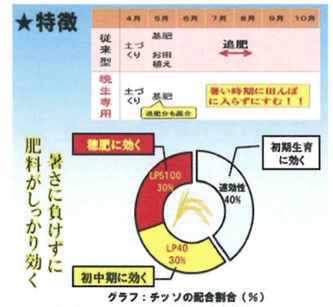
水稲の晩生品種である「ヒノヒカリ」は、平坦地の奨励品種として作付が拡大しています。しかし、登熟期に高温に遭遇した年には、胴割れ粒や未熟粒の発生により、玄米品質の低下することがあります。

そこで、総合農業技術センター作物特作科では、この原因の解明と対応策に取り組み、品質低下の原因が稲体窒素含量の低下によるもので、登熟期に肥料切れにならない栽培管理が必要であることを明らかにしました。そして、登熟期の肥料切れを解消し、追肥作業を必要としない晩生品種向け基肥一発肥料「甲斐てまいらず」を開発しました。

「甲斐てまいらず」肥料は、「ヒノヒカリ」向けとして本年度から販売が始まったことから、総合技術普及センターでは、更に「ヒノヒカリ」以外の品種への利用拡大を図ることをねらいとして、「あさひの夢」に対する適応性を現地水田において検討しました。

その結果、全般的には収量の増加を確認したものの、一部で、慣行栽培より低収量となった水田もあったことから、引き続き、施肥方法等について検討し、「甲斐てまいらず」肥料の普及に努めていくこととしています。

新肥料袋

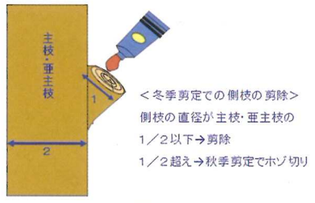


★標準施肥量：１０a当たり
●晩生品種（ヒノヒカリなど）
２袋～２．２５袋（４０kg～４５kg）
※チッソ施肥量：８kg～９kg

「甲斐てまいらず」の特徴

果樹技術普及センター

モモの冬季管理を徹底しましょう



切り口には癒合剤を塗布する

敷きわらによる乾燥防止対策

果樹技術普及センターでは、近年発生が目立っているモモの若木や成木が枯死する障害について、平成26年度より、台木の比較による実証試験を県内各地で実施しています。この結果については、今後、試験研究部門と連携しながら情報提供を行うこととしていますが、枯死障害を少しでも抑制するためには、以下の基本的な冬季管理の徹底が重要となります。

○凍乾害対策

冬季は乾燥や低温により凍乾害の発生が心配されるため、土壌水分を確保してください。

・土壌が乾燥している場合は、凍結層ができる前までに２０～３０mm程度の灌水を２～３回行う。
・土壌の乾燥を防止するため、樹の周囲にワラやバーク堆肥などを敷く（半径１ｍ程度）。

○枯死障害対策

特に若木については、以下の対策を徹底してください。

・強剪定せず、弱めの剪定を心がける。
・剪定は冬季を避け、樹液が流動し始めた後の３月以降に実施する（ホゾ切りの活用）。
・枯込み防止のため、大きな切り口には必ず癒合剤を塗布する。

中北地域
普及センター

水稲の畦道講習会を開催しました

峡北地域は、恵まれた自然環境を活かして、品質の良い米づくりが行われており、地元、梨北農協では、環境に配慮した持続的農業の推進と更なるおいしい米づくりを目指し、「ＪＡ梨北のブランド米」の構築に取り組んでいます。

具体的には、環境に配慮した梨北米の生産拡大と品質向上のため、生産者への栽培手引きの配布や支店毎の畦道講習会の開催など、関係機関と連携を図りながら、活動を行っています。

現地での講習会の様子

「梨北信玄米」パッケージ

７月に開催した畦道講習会では、普及センターや農協担当者が除草剤の散布回数を減らすための水管理や環境に配慮した肥培管理などの説明を行いました。参加した生産者からは栽培管理に関する多くの質問があり、活発な講習会となりました。

こうした活動により、生産者個々の環境に配慮した農業に対する意識が高まるとともに、消費者に安全、安心を届けるため、化学肥料・化学合成農薬を50％以上削減した特別栽培米「梨北信玄米」の栽培に積極的に取り組んでいます。

峡東地域
普及センター

女性農業者による 都市農村交流ツアーで地域資源をPR

11月13日（金）に女性農業者グループ「山梨きら星ネット峡東ブロック」が企画した都市農村交流ツアーが開催されました。このツアーは、地元の地域資源を女性農業者ならではの目線で掘り起こし、農業体験や郷土食の提供などを通して、女性農業者グループの起業活動につなげることを目的としています。

当日は、グループ員がガイドなどすべての企画・運営を行い、県内外から参加した19名が「枯露柿作り体験」や「縁側カフェやまいちでの昼食」、「勝沼トンネルワインカーヴの見学」などを楽しみました。

ツアー後のアンケートには、「枯露柿の素晴らしい景色が見られて良かった」、「ガイドさんの話から農業にかける思いが伝わり興味深かった」、「また企画があれば参加したい」などの感想が寄せられました。

グループでは、参加者の意見やツアーの反省点などを参考に、地域資源を生かした活動の発展を目指しており、普及センターでも引き続き支援を行っていきます。

秋の風物詩「枯露柿作り」体験

縁側カフェやまいちでの昼食

峡南地域
普及センター

飼料用米生産の新たな取り組み

県内の養鶏農家や業者の中には、飼料用トウモロコシの高騰を受け、代替として飼料用米の利用を希望するところがあります。また、米の生産農家に鶏ふん堆肥を提供し、耕畜連携の推進を考えているところもあります。

こうした中、市川三郷町内の農家６戸と１法人が、県内の養鶏業者向けの飼料用米生産に取り組み始めました。

きっかけは、昨年の米価の大幅下落に対し、米農家の経営安定を模索した町役場が、養鶏業者の要望をキャッチし、飼料用米生産による助成を活かそうとしたことと、ＪＡ西八代が養鶏業者との話をまとめたことからでした。

農家の中には、「人間が食べる米を生産できない」ことに対して、なんともいえない気持ちを抱く方もいましたが、「鶏がしっかり育つための米を責任もって生産しよう」と気持ちを切り替え、生産に取り組んできました。

その結果、10月中旬から順調に収穫が始まり、順次養鶏業者への出荷を行っています。

通常は行わない追肥をして栽培したことで例年より反収が1.5倍になった方や「来年は更に生産拡大をしたい」と話す方がいるなど、既に農家は来年の生産に思いを馳せています。

普及センターでも、来年の生産に備え「スイートコーン後作ほ場での肥培管理」、「省力化のための基肥一発肥料の活用」、「養鶏業者の鶏ふん堆肥の利用」等について、調査結果をもとに、農家と意見交換をしながら栽培方法の改善を図る予定です。

取り組み検討会議（2月）

収穫適期判定の現地検討会（10月）

富士・東部地域
普及センター

地域資源を活用した 都市住民との交流ツアーを開催しました

富士・東部地域の農村女性が企画、運営する「富士山の麓で学ぶ歴史と農ツアー」が富士吉田市及び鳴沢村において開催されました。農産物や農産加工品、歴史的資源など、様々な地域資源を体験してもらおうと、受け入れも農村女性や地域ガイドの方々が行いました。

ビオラ染め体験の様子

当日は県内外の方20名が参加して、『御師（おし）の家（いえ）「毘沙門屋（びしゃもんや）」でのお札づくり』や、『ビオラ染め＆フレッシュハーブティーパーティー』を行い、『ミニマルシェ』では富士北麓の特産野菜などの買い物も楽しんでいただきました。昼食は、御師（おし）の家（いえ）「中雁丸（なかがんまる）」で、郷土料理の吉田のうどんと御師料理を堪能していただきました。移動中も、毘沙門屋当主や農村女性のガイドにより地域の歴史や資源などを学び、富士北麓地域への理解を深めてもらうことができました。

御札づくり体験の様子

参加者からは、「ビオラ染めが楽しかった」「都会では体験できない企画で、とても良かった」などの意見をいただきました。今後も、農村資源の魅力を活かして、交流人口の増加に向けた支援を行っていきます。